



Title	スタディ・クエスチョンで読む古典：『現実の社会的構成』（バーガー＆ルックマン）を読む（その2）
Author(s)	長島, 美織
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 34, 35-46
Issue Date	2022-04-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85256
Type	bulletin (article)
File Information	02_nagashima.pdf



[Instructions for use](#)

スタディ・クエスチョン で読む古典

『現実の社会的構成』

(バーガー&ルックマン)を読む(その2)

メディア・コミュニケーション研究院 教授

長島 美織

Reading Classics through Study Questions:
“The Social Construction of Reality : A Treatise
in the Sociology of Knowledge” by Peter L.
Berger and Thomas Luckmann (Part2)

NAGASHIMA Miori

abstract

This is the second part of a series of attempts to propose and demonstrate a new method of reading academic masterpieces, which are otherwise difficult for readers to grapple with. The proposed ‘Study Question Method’ helps students read through and understand the target academic manuscript precisely and critically. The sample piece selected in this series of essays is “The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge”, by Peter L. Berger and Thomas Luckmann. The paradigm introduced in this book later got to be known as social constructionism and has made a big influence on not only sociology but also other academic fields such as psychology, pedagogy, gender study, and science in nursing. This part 2 examines Chapters 1 and 2, which deals with the fundamental characteristics of everyday knowledge. It consists of study questions, and corresponding answers and comments.

1 読解題材としている書籍とスタディ・クエスチョン・メソッドについて¹

前回から取り上げている古典は、Peter L. BergerとThomas Luckmannによる『The Social Construction of Reality—A Treatise in the Sociology of Knowledge』という書物で、1966年にアメリカで原著が、1977年に最初の日本語訳が出版されています。この翻訳は、2003年に、『現実の社会的構成—知識社会学論考』という、より英語の原題に近いものに改題され現在に至っています。ここでは、2007年の新版第3刷を使用しています。前回の解説(その1)²に引き続き、スタディ・クエスチョン・メソッド(Study Question Method)を用いて、この本全体の分析を支える概念や用語、問題意識を語っている第I部を読んでいくこととなります。以下、引用は、ことわりのないかぎり、この対象書籍からのものとなります。また、以下で対象書籍の著者たち、つまり、Peter L. BergerとThomas Luckmannを指すのに、B&Lという表記を用います。

2 「第1章 日常生活の現実」の読解

まずは、第1章の目的を確認しておきましょう。この本全体の目的が「日常生活の現実についての社会学的分析」、あるいは、「日常生活における行為を導く知識」の社会学的分析であるということ(その1)での解説で確認しました。そうであれば、まず、「日常生活の現実」の本質的な性格がどのようなものであるかを確認しておく、ということが、この先の分析を進めるために必要となってきます。それをやりましょうというのが、「I部 日常生活における知識の基礎」の冒頭の章であるこの第1章の内容となります。

SQ 28-29ページで、日常生活の現実とはどのようなものとして描かれていますか? キーワードを2つ挙げて下さい。

該当する部分は、以下の通りです。

「日常生活は一貫性をもった世界として人びとによって解釈され、かつまたそうしたものとして彼らにとって主観的に意味のある一つの現実としてあらわれる。……日常生活の世界は社会の通常の成員によって、彼らの生活の主観的に意味のある行動のなかで、現実として自明視されているだけではない。それは彼らの思考や行動のなかにその源をもつと同時に、こうした思考や行動によって現実的なものとして維持されている世界でもある。」(28-29)³

▶1 本稿が依拠するスタディ・クエスチョン・メソッドのよりくわしい説明は、以下の研究ノートを参照して下さい。

長島美織, 2017, 「スタディ・クエスチョンで読む古典—「政治学は科学として成りたちうるか—理論と実践の問題」(マンハイム)を読む—(その1)」『メディア・コミュニケーション研究』70, 「[保険とリスク](フランシス・エワルド著)を読む—スタディ・クエスチョン・メソッドの試み—その1: 第1段落から第4段落: insuranceについて」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』24: 109-124。

▶2 ここで(その1)とは、以下の研究ノートを指します。長島美織, 2021, 「スタディ・クエスチョンで読む古典『現実の社会的構成』(バーガー&ルックマン)を読む(その1)」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』33: 85-96。

▶3 引用の中の下線は、本研究ノートの著者のものです。以下同様。

▶4 詳しくは、「序論」の部分を読み解いた(その1)(注2)も参照のこと。

キーワードとして重要なのは、「一貫性」と「自明視」です。日常生活の現実、一貫性とともな当たり前なものとして、私たちの前にあります。そして加えて、重要なのは、こうした日常生活の現実、私たちの思考や行動の基本となるとともに、私たちの思考や行動によって、「維持されている」ものでもあるという点です。つまり、それは、一見強固に私たちの生活における認識を支えているものでありながら、また一方で、絶え間なく、確認され維持されなければならないものでもあるという、もろさを備えたものでもあるのです。

さらに気をつけておきたいのは、「主観的に意味のある」という表現です。これは、ヴェーバーの「社会学の認識の対象は行為の主観的な意味連関である」⁴という立場を継承した表現で、ごくごく簡単に、「自分(主観)にとって意味のある」ということですが、それが構成員にとって、完全にバラバラなものであれば、社会というものを営むことも難しくなるわけです。このあたりを、B&Lは、以下の通り、表現しています。

「……、われわれは日常生活における知識の土台について、つまり間主観的な常識の世界が構成される主観的過程(および意味)の客観化について明らかにすべく努めなければならない。」(29)

この「主観的過程(および意味)の客観化」がないと、日常生活の一貫性も担保されず、それを自明視することもできないのです。これは、本書全体の目的ですが、そういった分析のための「出発点として役立つ」範囲で、この日常生活の現実というものの特徴を把握しておこう、というのが、この第1章の目的となるわけです。

SQ それでは、この「日常生活の現実」を、社会学的分析が進められる程度に捉えるというこの予備的な作業を行うにあたって、B&Lは、どのような方法を用いると述べていますか。

該当部分は、以下の通りです。

「日常生活、あるいはむしろ日常生活の主観的経験といった方がよいが、こうしたものの現象学的分析は、分析対象である諸現象の存在論的地位に関する主張はさし控えると同時に、いかなる因果的ないしは発生論的仮説をもさし控える。」(30)

これは、(その1)で読んだ部分と重なるところがありますが、「現象学的分析の方法」つまり、「記述的な方法」です。そして、それは、「存在論的」分析ではなく、因果的あるいは発生論的な分析でもない、と述べられています。このような説明の後、意識の性質についての現象学的な記述が、30ページから始まります。

SQ 30-31ページで述べられている意識と現実の基本的な性質とはどのようなものでしょうか。それぞれキーワードは何でしょうか。

関連する部分を読んでいきましょう。

「意識は常に志向的なものである。それは常に諸々の対象を志向するか、あるいはそれらのものに向けられている。われわれは決して意識そのものを成り立たせている推定上の基底のようなものは把らえることはできず、ただ把らえることのできるはある何物かについての意識だけである。……詳細な現象学的分析は経験のさまざまな層を明るみに出すと同時に、さまざまに異なった意味の構造……を明らかにしてくれるであろう。ここでわれわれにとって関心があるのは、すべての意識に共通してみられる志向的な性格である。」(30-31)

まず、意識の部分について見ておきましょう。ここで、「志向的」という訳語に対応するのは、原著の英語では、intentionalという言葉です。純粋な水というものが存在しないのと同様、純粋な意識というものは存在せず、意識は常に何かに向けられている、という指摘です。意識は、自分の外部の何かに向けられることも、自分の内部の感情や思考に向けられることもあります。目の前のコンピュータそのものに意識が向いている場合もあり、どのようなメールを書こうかと考えている際のように、主観的な概念や記憶、思考に向けられていることもあります。しかし、何も対象をとらない意識というものはない、とB&Lは指摘しているのです。何に意識が向いているのか、わからないような、ぼっとした意識状態もあるのでは、と考えるかも知れませんが、そこにおいても、意識は純粋な意識としてあるのではなく、対象が目まぐるしく変化している、あるいは、対象に対する志向性が弱い状態と考えることができます。

また、私たちの意識が何に志向するかということをさらに考えると、複数の現実があることが理解できます。つまり、意識は、夢の中の現実における対象物に向くこともあれば、目の前のスマートフォンに向くこともあるのです。このように現実は、多元性を持っていますが、その中でも、「日常生活の現実」は、「すぐれた意味で現実として現れるもの」であり、これを「無視することは不可能」(31)であると述べられています。したがって、ここで押さえておくべき、ポイントは、意識の「志向性」と現実の「多元性」です。

SQ 32-33ページでは続いて、「日常生活の現実」を支える基本的な要素について述べられています。それらはどのようなものでしょうか。

まず注目されているのは、日常生活の現実秩序を与えるものとしての「ことば」です。

「日常生活で用いられることばはたえず私に必要な対象化された事物を提供

し、秩序を設定する。そしてこの秩序のなかでのみ、これらの事物は意味をなし、日常生活は私にとって意味をもつ。……このように、ことばは社会における私の生活の座標を示すと同時に、その生活を意味ある対象によって充たすのである。」(32)

この章の冒頭で、日常生活の現実の特徴として、「自明性」と「一貫性」が指摘されましたが、ことばは、現実秩序を与え、座標軸となるため、「一貫性」を与えるのに、とても重要な役割を果たします。と同時に、この秩序によって、日常生活の現実を安定させ、それに意味合いを与え、「自明性」を供給するものともなります。ことばについては、第3章で再び取り上げられます。

32ページ後半の次の段落で指摘されているのは、先に指摘された「日常生活の現実」の多元性と関連しての〈ここといま〉です。これは、最も現実的なものでありながら、実は、意識は、〈ここといま〉に留まらないことも多いのです。しかし、この空間的にも時間的にもまさに現前する〈ここといま〉は、「私が直接身体によって操作する日常の領域」であり、その意味で、私が今行っていること、過去に行ったこと、そして未来において行うこと、によって変化させる領域だと述べられています。

SQ 33ページ後半に、「間主観的な世界」ということばが現れます。これはどのようなものでしょうか。

関連する箇所は、以下の通りです。

「さらにまた、日常生活の現実は、私にとって間主観的な世界として、つまり私が他者とともに共有する世界として、あらわれる。」(33-34)

この段落までは、「日常生活の現実」の私的な側面について焦点が当たっていました。特に、〈ここといま〉の世界は、「すぐれた意味で私の世界」であると述べられていたのです。しかし、同時に、その日常生活は、「他者ととも

に共有する世界」でもあります。

「私はこの世界に対する私の自然的態度が他者の自然的態度に対応していること、彼らもまたこの世界が整序づけられている対象化された事物を理解しているということ、そして彼らもまたそこでの彼らの存在の〈ここといま〉の周りにこの世界を構成しており、そのなかで活動するためのさまざまな計画をもっていること、を知っている。」(34)

先に私の日常生活の現実として指摘された性質は、それぞれ、他者においても、成り立つものであり、そうして、私は、そのように他者も日常生活の現実を生きているであろうということを知っているわけです。

私の主観的現実と彼らの主観的現実との交わりについて、B&Lはさらに以

下のように述べています。

「……最も重要なのは、この世界にあっては、私の意味と彼らの意味との間には不断の照応関係が存在するということ、つまりわれわれがその現実に関して共通の感覚を分有しているということを私が知っている、ということである。」(34)

「共通の感覚」という表現が出てきました。私の自然的態度が他者の自然的態度に対応しており、それに対しては、その根底にある知識や意味づけとともに、絶え間ない確認と(非常に微妙な)修正が日常繰り返されているのです。共通の感覚は、各個人の自然的態度を保証し、そして、「まさしくそれが多くの人びとに共通する世界と関係するという理由から」、それは、「常識的意識の態度」ともなります。つまり、「常識的な知識」とは、「日常生活の常態的で自明的なルーティーン」のなかで私が他者ととも共有している知識(34)であると定義されます。それは、安定的な日常生活で繰り返し反復される現象のなかで、自身と他者がともに共有している知識なわけです。ここで、再び、自明性が浮上していることに注目してください。次の段落では、この自明性という点についてさらにその複雑性を指摘していくこととなります。

SQ 34ページ後半からの段落で「自明性」に気がつくためには、何が必要だと述べられているのでしょうか。また、自明性を軸に、日常生活を切り分けるとすると、どういった部分に分けることができるのでしょうか。

考えてみると、自明性に気がつくということは、意外と難しいことです。自然に生活していると、何かが当たり前だと気がつくことはできません。B&Lの言葉を借りれば、当たり前に気がつくためには、「極端な視座の転換」が必要になるのです。自明な現実を疑うことには、普通の生活人としての「自然的態度から哲学者ないしは科学者の理論的態度への移行」が必要なのです。

こうして注意深く日常生活の自明性を考えてみると、日常生活は、常に、変化がなく自明的なルーティーンで満たされているばかりではないことに気づきます。「現実のすべての側面が等しく没問題的というわけではない」のです。日常生活は、①決まり切ったルーティーンの部分と②解決を要する部分とに分かれます。(35ページの例を読むとこのあたりが一層明確になるでしょう。)

そして、没問題的な日常も、いつ問題解決が必要な日常となるかも知れません。「問題の出現によって日常的な現実の連続性が断ち切られる」ということが発生します。これは、まさに、病気になってはじめて健康のありがたさがわかる、といった現象です。通常は、何か問題が起こって初めて、自明的で一貫性があり安定的な日常に気がつくわけですが、これらの問題が発生した時、人びとが最初にとる反応は、問題の部門をすでに没問題的となっている部門へ統合するというものです⁵。(ここでも、36ページの例を読むと理

▶5 これは、心理学では、正常性バイアス (normalcy bias) として知られています。

解が一層明確になるでしょう。)

SQ 37ページ後半に、「飛び地」ということばが現れます。これはどのようなものでしょうか。

該当の箇所は、以下の通りです。

「日常生活の現実と比べてみると、他の諸々の現実は限定された意味の領域としてあらわれる。つまり、それらは経験の限定された意味と様式によって特徴づけられる、至上の現実ないにおける飛び地としてあらわれる。」(37)

ここまでは、日常生活の中でも、問題発生によって自明性が揺らぐことがあるという点が指摘されていましたが、さらに、生活の中では、日常生活を超えた現実があるということについて述べています。つまり、「飛び地」とは、限定された意味の領域で、そこにおける限定された経験の意味と様式によって、特徴づけられるもの、ということになります。例えば、劇場などの芸術や宗教儀式、あるいは、遊びの空間といったことを考えるとすぐに納得がいくでしょう。これらの領域と日常生活の現実との往来には、多かれ少なかれ、「まなざしの転換」が必要です。

「すべての限定された意味の領域は日常生活の現実からのまなざしの転換によって特徴づけられる。……しかしながら、日常生活の現実は、たとえそうした〈跳躍〉があったにせよ、なおかつその至上の地位を保持しつづける、ということを経験しておくことは重要である。」(38)

「まなざしの転換」という用語は、志向性とも関連しています。そして、「飛び地」と「日常生活の現実」との「跳躍」については、ことばを題材として考えることもできます。B&Lは、「ことばは常に日常生活の方を志向しつづけている」として、日常生活の優位性を指摘していますが、日常生活での言葉が、少し異なった意味を持つものとして、その「飛び地」で使われることもあります。また、その領域、「飛び地」に精通している人びとの間でのみ使われる表現というものも発生してきます。ジャーゴンや専門用語、業界用語と言われるものです。

SQ 39ページ後半から、「時間性」についての説明が入ってきます。時間の構造は、日常生活において、どのような二面性を持っているのでしょうか。

「日常生活の世界は空間と時間の双方によって構成されている」(39)ものの、意識との関連においては、時間の方がより重要であるとして、時間についての掘り下げが、この章の最後まで続くことになります。

まず関連する部分を読んでおきましょう。

「時間性は意識の本質的な属性をなしている。意識の流れは常に時間的に秩序づけられている。……どの個人もすべて時間の内的流れについての意識を持っており、この流れはまた……身体の生理学的リズムにその基礎をもっている。」(39)

時間は、意識の流れにとって、欠かせないものであり、個々人の意識を秩序づけるものです。と、同時に、間主観性も支えるものです。

「……日常生活における間主観性も、やはりまた時間という次元をもっている。……この世界におけるすべての私の経験はこの世界の時間によってたえず秩序づけられており、実際、この時間によって包みこまれている。」(39-40)

40ページに登場する例は、とてもわかりやすく、意識の中の時間は、必然的に、体の状況の回復であるとか、社会的なルールなどがもたらす制約や順序に従わなければ、現実化しないことを描き出しています。つまり、社会と自分自身の肉体は、「待つ」といったことも含めて、様々な現実のあり方に制約を課してくるのです。

そして究極の制約として、「死」というものが立ちちはばかります。「死」が避けられないと知っていることで、私の態度や意識も変化していくものであるということが指摘されています。

「……こうした時間の構造は、すでに指摘したように、強制的なものである。私はこの時間の構造によって課された順序というものを、勝手に逆転させるなどということはできない——〈物事は手順にしたがって〉という原則は日常生活に関する私の知識の基本的要素をなしている。」(40)

時間は、強制的に私たちの思考と行動を規制するとともに、また、「時間と暦とがまさしく私が〈自分の時間を生きている人間〉であることを保証する」と述べられています。つまりは、私の思考や行動は、「この時間的構造の枠内」に位置付けられなくてはならず、そしてその構造の中でのみ、「日常生活は私にとってその現実性の主調を保持しつづける」(41)ことが可能となるのです。ここまでのところをまとめると以下ようになります。

- A) 肉体や社会が課してくる物事の順序といった「時間の構造」は、強制的なものである（「死」は免れない、入学願書を出すことなく大学へ入学することはできない、など）。
- B) 私の意識や間主観性は、時間の構造の中に位置付けられることによって、秩序づけられ、保証される。

つまりは、時間の構造は、A) 客観的なものとして私の行動を規定するとともに、B) 私の行動や思考に他者とも共有可能な秩序を与えるという二面性を持って日常生活に作用しているということが出来ます。

第1章では、「第I部 日常生活における知識の基礎」のはじめの章として、「日常生活の現実」の持つ性質について、現象学的分析の方法、つまり記述的な方法を用いて、把握してきました。それらは、「〈経験的〉ではあるものの、〈科学的〉ではない方法」(29-30)であり、そこで指摘されたことは、以下のように、まとめることができるでしょう。

1. 意識は志向的なものであり、それぞれの現象は、異なった位相に属するものとして、認知される。
2. この意識の志向性に対応して、私は、世界を複数の現実からなるものとして、認識する。現象は、多元的であるが、このなかで、至上の地位を持つのは、日常生活の現実である。
3. 日常生活の現実秩序を与えるもののひとつは、ことばである。
4. 日常生活の現実のなかで、さらに、直接的なものは、〈ここといま〉である。
5. 私は、日常生活の現実を他者と共有する。つまり、日常生活の現実は、間主観性を持つ。
6. 日常生活の現実は、自明視されているが、その自明性には、領域により、濃淡がある。自明な日常であっても、何らかの問題によって、自明性が低下することがある。
7. 日常生活の現実は、その多元性と領域を拡大することにより、「飛び地」として捉えられるような複数の現実を含みうる。それは、子供にとっては、遊びの世界であり、大人にとっては、特殊な訓練を伴う仕事の領域であったり、美的経験や宗教的体験であったりする。こうした限定された意味の領域の間、そしてそれらの日常生活の現実との行き来は、「まなざしの転換」を伴うものである。
8. 時間は、意識の本質的な性質を規定するものであるとともに、日常生活における間主観性のなかでも、重要な枠組みを構成するものである。

3 「第2章 日常生活における社会的相互作用」の読解

SQ この章の目的はなんですか。

これは、以下のように冒頭にはっきりと述べられています。

「日常生活の現実他者とともに共有されている。しかしながら、それではこれらの他者自身は日常生活においてどのように経験されているのであろうか。」(43)

B&Lは、他者との経験においても、原型となるのは対面的状況であるとして、その特徴のいくつかを取り上げて論じています。第1章に続き、ここで援

用されている方法も、現象学的で記述的な方法です。

SQ 43-48ページにおいて、対面的状況の特徴が3つ指摘されています。それらはどういったものでしょうか。

該当の部分を読んでいきましょう。

「こうした対面状況がつづくかぎり、私の〈ここといま〉は彼の〈ここといま〉と相互にたえず浸透し合うことになる。その結果、ここには私の意志表出と彼の意志表出との間に持続的な相互交換がみられるようになる。……[微笑みの例]⁶……この表出行為の持続的な相互性はわれわれの双方にとって同時に参加可能なものとなっている。このことは、対面的状態のもとにあつては他者の主観性は最大限の徴候を通じて私に理解しうる、ということの意味している。……社会的結びつきの他のいかなる形態といえども、対面的状況におけるほど主観性の徴候を豊富に再生しうるものはない。ここにおいてのみ、他者の主観性は文字通り〈近い〉ものとなる。」(43-44)

対面状況では、他者は、〈ここといま〉のなかで、「生まましい現前性」とともに現れているとされ、私と他者の間では、会話にしろジェスチャーにしろ表情にしろ、絶えず相互作用が起こり、このような状況のなかで、他者の主観性は、他の状況に比べて、〈近い〉ものになるとされています。

この〈近い〉という性質は、内省の必要性という概念を軸にさらに深く論評されています。

「対面的状況にあつては他者は完全に現実的なものとして存在する。……実際、対面的状況における他者は私にとっては私以上に現実的である、という論も成り立つかも知れないのである。……[私自身を知るには内省行為が必要]⁷……対面的状況にあつては他者はそうしたものとして現に提示されている。……こうした他者への近づきやすさは持続的なものであると同時に内省以前のなものでもある。」(45)

他者は、現に提示されているもので、対面的状況においては、私以上に現実的と言えるかも知れないと述べられています。というのは、対面的状況で、自分の考えや感情を知ろうと思うと、周りに向いている意識の志向性を一旦中断し、自分の内側に持っていくという「まなざしの転換」が必要となるからです。一見、逆説的に聞こえますが、他者は、そういった内省を必要とせず、直接的に認知されるという指摘です。

次になされるのは、対面的状況において、持続的に行われる他者との相互作用によって可能となる、両者の関係における変化の可能性についての指摘です。つまり、「対面的状況における他者との関係は極めて弾力性に富んだもの」(45)であり、そういった相互の関係は、「進行中の極度に多彩で微妙な主観的意味の交換過程によって」絶え間なく変化していく可能性があるか

▶6 B&Lからの引用部において、省略されている部分の内容をこのような形で示します。

▶7 注6と同様。

らです。対面的状況においては、相手を欺き続けることは難しいと指摘されています。これは私たちが、通常、何か混み入った話をするときや、誤解を解きたいと願う時などに、直接会って話をするという行為に出ることが多いということからも、納得のいくことかと思えます。

しかし、この直接的で流動的な対面状況にあっても、私たちは、ステレオタイプ的な認知方法をほとんど無意識のうちに援用していることもまた、指摘されています。

「他方また、対面的状況にあつてすら、私は他者を類型化的な図式を用いて理解する。……日常生活の現実には対面的な出会いの場においてそれを用いて他者が理解され、〈取り扱われ〉る、類型化的な図式が含まれている。」(46)

私たちは、対面状況において、まずその状況自体がどのような目的を持っているのかということを考えるでしょう。それは、新しく建てる家の設計の相談なのか、何らかの商談なのか、それとも親しい友人との食事なのか、ということで、状況自体を類型化します。それに加えて、相手を、〈男〉〈ヨーロッパ人〉〈売り手〉などのカテゴリを使って、類型化するでしょう。そして、これらの類型化は、「修正を迫られることのないかぎり」保持され、その「状況における私の行動を決定する」(47)ものとして作用するのです。

ここで付け加えておかなければならないことは、これらの対面的状況において、類型化図式は相互的なものであるという点です。私も相手を類型化しますが、相手も私を類型化するのです。対面的状況では、それがいくら現前的で直接的であったとしても、これら相互の類型化が交渉関係をもつこととなります。

SQ 48ページから、対面的状況における相互作用についての考察に続いて、次第に対面的でない状況における相互作用についての考察が始まります。その特徴は、どのようなものでしょうか。

「社会的相互作用の類型化図式は、それが対面的状況から遠ざかるにつれて、次第に匿名的なものとなる。」(48)

もちろん、類型化図式そのものは、ある人をX(国籍、性別……)というカテゴリとして認識するわけなので、匿名性を含んでいます。しかし、対面的状況の中では、相手は類型化図式や匿名性を打ち破り、ユニークな個人として個性化して現れることが可能です。その意味で考えると、日常生活における他者の経験において重要なのは、「直接性ないしは非直接性」、つまり、その経験が直接の経験なのか否か(±直接)、という指標であると、B&Lは述べています。この指標を使うと、直接接触がある同僚と直接接触のない同時代人、さらにその同時代人のなかでも、自分が関係するだろう人(ビジネス関係)と直接的な関係は一生ないであろう人(イギリス女王)といった具合に段階が分かれていくと指摘しています。

(非) 直接性に加えて、匿名度の濃淡に影響するのは、「興味の度合いと親密性の度合い」(50) です。例えば、毎日同じ時間に通勤している場合、列車や駅で同じ人に遭遇するということはよくあります。しかし、そのように、毎日顔を見る人であっても、通常、毎朝駅で会う人の匿名性は、高いままです。そして、「日経新聞の読者」といったそもそも特定化することが期待されていない種類の類型化は、匿名性が高いまま維持されることとなります。

加えて、時間軸を未来と過去に延長することにより、「私の子供」や「未来の世代」、そして「幕末の志士たち」「北海道に入植した私の祖先」などといったように、カテゴリを増やすことが可能です⁸。未来についての類型化は「ほぼ完全に個性化された内容を欠いた、実質的には空虚な投影」とならざるを得ないのに対して、過去における類型化は、一定の個性的な特徴を備えています。そして、これら過去と未来の2つの類型化の枠組みがいかに匿名性を帯びているとしても、それらのカテゴリは、頻繁に、私たちの日常生活の現実のなかに入り込みます。また、場合によっては、「極めて決定的な形で入り込む」(51) こともあるのだということ認識しておくことは重要でしょう。

B&Lは、ここまでの論述を以下のようにまとめています。

「以上みてきたように、日常生活の社会的現実とはさまざまな類型化図式の連続線上において理解されており、これらの図式は対面的状況の〈ここといま〉から遠ざかるにつれて、次第に匿名的なものになっていく。こうした連続線上の一方の極には、対面的状況において私が頻繁に、そしてまた親密に関係し合う他者……が存在する。そして他方の極には、その性格そのものからして対面的な相互作用の場では決して得られない、高度に匿名的な抽象物が存在する。社会構造とはこうしたさまざまな類型化図式と、そうした図式によって作り出された反復的な相互作用のパターンの総体に他ならない。そうしたものとして、社会構造は日常生活の現実の本質的要素をなしているのである。」(50-51)

類型化について詳しく論述してきましたが、こうした類型化は、実は、社会構造と繋がっていきます。社会構造とは、反復的な相互作用のパターンとそれらの類型化図式の積み重ねであり、その意味で、これらは、日常生活の現実の本質的要素であると考えられるという点が非常に重要です。この類型化が社会構造に繋がっていく過程については、第II部で詳しく解説されますが、当初、かけ離れたものとして捉えられていた個人の主観と社会構造が、いったいどのように結びつけられるのかという本書を貫く論点に関して、ここで一步を踏み出したこととなります。

▶8 この部分は、51ページからこの章の最後に渡って、述べられていることで、若干順序が逆さまになりますが、ここで、まとめておきます。